

## 自己評価報告書(最終報告)

コース等名

芸術系コース(音楽)

記載責任者

長島 真人

## ■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

## I. 学長の定める重点目標

## I-1. 教員就職率向上方策について

本学は第二期中期目標・中期計画において、「学士課程において教員就職率を70%以上にする」と明記している。教師を目指す学生が一人でも多く自己の進路希望を実現できるよう、この数値目標を達成するのはもちろんのこと、より一層教員就職率を上げるため、貴専攻・コースではどのような取り組みを行うか。具体的な方策を示してほしい。

## 1. 目標・計画

我が国の教員採用においては、年々、学校現場において即効力のある人材を求める傾向が強くなり、採用試験の内容は、一般教養や専門的な知識や技術にとどまらず、これらを子どもたちとの関わりの中で臨機に応用することができる能力を問うようになってきている。そこで、今日に期待されている授業実践力や生徒指導力、協働力の基礎を確実に育ませていくために、以下のようなことに留意していく。

- (1) キャリアノートの記述内容を工夫させるために、授業の節目ごとに、授業内容の要約と気づきや自己の課題を簡潔に述べる演習を行う。
- (2) 授業やコース内での作業活動においては、学生たちが共同的な課題の中で問題を解決していくような演習課題を工夫していく。特に、ロールプレイや模擬授業、場面指導等の場において、共同的、対話的な演習を工夫し、話術やコミュニケーションの技が鍛えられるようにする。
- (3) 個別的な指導場面においては、学生たち一人ひとりの学習達成状況を踏まえながら、より適切な学習課題の選択と指導を工夫する。
- (4) 具体的な就職活動を開始する学生、院生たちのために、各都道府県の教員採用試験対策に合った補習や履修相談ができるようにする。

## 2. 点検・評価

- (1) 学生たちが最終的に総括的な省察が行えるようにするために、キャリアノートの記述方法を指導し、平素の授業の中で、授業の節目ごとに、学修内容の要約と気づきや自己の課題を簡潔に記述する演習を行った。そして、ここで得た方法を、キャリアノートの記述に活かすように指導した。
- (2) 授業やコース内での作業活動においては、学生たちが共同的な課題の中で問題を解決していくような演習課題を多く取り入れた。特に、ロールプレイや模擬授業、場面指導等の場において、共同的、対話的な演習を工夫し、話術やコミュニケーションの技が鍛えられる場を設けた。ピアノの授業においては、他の受講生の演奏を聴いて、その長所や直した方がよいところ(短所)などを分析し、それをことばで説明出来るように指導した。管楽器関連の授業においては、アンサンブルの際、一人の学生がピアノを弾きながら合奏全体をまとめるという活動を通して、対話的なコミュニケーションが深められるようにした。
- (3) 個別の指導においては、一人ひとりの学習達成状況を考慮しながら、学生の興味や希望に即ただけでなく、大学での学習課題として内容的に相応しい課題を与えられるように工夫した。声楽の授業においては、学生が自分の力を客観的に観察し、省察できるように、演奏の録画をとり、それを見ながら適切な指導を行った。管楽器関連の授業においては、個人の演奏に対して学生同士が互いに伴奏をするという活動の中で、互いの学習達成状況を観察し、その場に即した対話をしながら学習を進めるようにした。創作においては、共通の課題であっても、ひとりひとりの興味・関心や感性を尊重し、自己実現の喜びと表現によるコミュニケーションの喜びを実感できるように指導し、多文化的で柔軟な音楽観をもち、互いに認め合い、自他を含めた種々の文化に開かれた態度を醸成するよう努めた。
- (4) 具体的な就職活動を開始する学生、院生たちのために、各都道府県の教員採用試験対策に合った補習や履修相談ができるように努めた。具体的には、小論文や自己PR文の添削指導、集団討論や模擬授業、場面指導等の演習、弾き歌い、音楽理論、創作、ソルフェージュ、聴音などの補習を行った。

## Ⅱ. 分野別

### Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

#### 1. 目標・計画

教育支援については、平成17年度から実施している教員養成コア・カリキュラムをさらに充実させ、「教職実践演習」にスムーズに連結できるように、教育指導体制を確立させていく。そのために以下の内容を検討し、改善を図る。

- (1)第1コア授業「初等中等教育実践基礎演習」において、学生が大学生活にできるだけ早く適応し、意欲的に授業に参加し、学校教員としての任務と仕事内容について十分に理解できるようにする。
- (2)第2コア授業「初等中等教科教育実践Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の内容について、教科専門と教科教育の教員のコラボレーションを進め、教育現場の教員との連携を深めながら、教育実習に十分対応できる教育実践能力を高めていく。また学修キャリアノートの充実を図り、教職実践演習へのスムーズな連結を図る。学生生活支援については、学生一人ひとりの個性と能力を伸ばす観点から、これまでの指導体制を崩すことなく、さらに内容を検討し改善・充実させる。
- (3)各学年の担任教員と学生との懇談会や、コースの全学生と教員との懇談会等で、学生生活や進路、また音楽について語り合える場を設ける。
- (4)教員採用試験のために、これまでもまして「各種実技指導、音楽理論、小論文指導、面接指導、模擬授業、授業案作成指導等」音楽コースの全教員協力のもと支援体制を充実させる。

#### 2. 点検・評価

教育支援について

- (1)第1コア授業では、昨年度と同様に、教育実践という見地から、音楽科教育のエッセンスを特定し、音楽授業や音楽教師のイメージが芽生えるように指導内容を工夫した。特に、ハンドサインによるソルミゼーションの演習や歌唱指導の演習を通して、人前で落ち着いてパフォーマンスが出来るように支援した。
- (2)第2コア授業に関して、初等中等教科教育実践Ⅰでは、一冊の教科書と指導者の範唱、範読、指揮、語りかけや問いかけだけで、模擬授業を試みる演習を行い、音楽の学習指導の中核的な技をイメージすることができるように指導内容を工夫した。初等中等教科教育実践Ⅱでは、歌唱教材の教材研究の方法と伴奏の方法についての演習を行った。特に、伴奏の方法についての演習では、指導する生徒たちの実状に即した音量やテンポ、バランスで弾くことを考えさせ、教育実習で活用することの出来る技術を習得させた。初等中等教科教育実践Ⅲでは、音楽科教育学担当の教員と作曲担当の教員がTTで授業を行い、双方の専門的な立場から中学校教材の楽曲の中にみられる音楽の特性と教材としての特性について講義し、これらを統合し応用する場として、模擬授業によるシミュレーションを試みた。また、教育現場の教員との連携を深めながら、教育実習に十分対応できる教育実践能力を高めていくことができた。さらに、学修キャリアノートの充実を図り、教職実践演習へのスムーズな連結を図った。第2コア授業に続く教職実践演習では、キャリアノートを活用して省察が行えるようにワークシートを開発し、ここで、総括的に省察された内容から、個人面接や集団討論、教科指導と教科指導を統合した模擬授業の演習を試みた。そして、これらの演習をふりかえりながら、キャリアノートの最終的な記述を促した。学生たち一人ひとりに対して、自分自身の成果と今後の課題を明確に意識させることができた。

学生生活支援について

- (3)学生生活や進路、また音楽について語り合える場として次のような場面を設けた。クラス担当教員として、コース教員がそれぞれの学年で学生と懇談会を行った。新入生、2年次生および3年次生合宿研修に参加し、履修相談・進路相談等を行った。前期の授業の後半期に個人面接とクラス懇談会を実施した。年2回の学内演奏会や卒業修了演奏試験に向けた事前の準備(係打ち合わせ会、役割ごとの活動)や演奏会当日の活動への取り組みに関して、演奏会・試験後に反省会を開き、学生たちの発表態度や内容、ステージ・マネージメント等について省察させた。こうした活動は、学年の枠を越えた幅広い学生間のコミュニケーション能力を育成する良い機会となった。また、論文の中間発表会等の行事を通して、音楽について、教育において音楽がもたらす力について、進路や人生設計について、学生と教員が語り合うことができた。健康面や精神面で不安定な状況に陥った学生に対して、コースの教員全員で問題の解決に向けて対策を検討し、対処した。
- (4)教員採用試験のために、各教員がそれぞれの専門性から次のような指導を積極的に行った。教員採用試験の準備として、弾き歌いやピアノ初見演奏、ソルフェージュ、音楽理論、創作等の指導を行った。授業外で個々の学生の採用試験の課題にそって、小論文や模擬授業、場面指導等の指導を行った。聴音の課題に問題を抱える学生に対して、個別に指導を行った。採用試験でリコーダーの試験がある学生に対して具体的な演奏法や初見演奏の指導を行った。

## Ⅱ-2. 研究

### 1. 目標・計画

本コースでは、教員一人ひとりの専門分野における研究を尊重すると同時に、これらを基盤として、全教員が協力して音楽科の教員養成を具体的に展開するために必要な授業計画や指導法の研究を工夫してきた。このような体制を維持しながら、音楽科授業実践力の育成をめざした教員養成コア・カリキュラムを有効に生かすために、さらなるFD推進の可能性を検討する。

- (1)各教員が余裕をもって研究に従事できるような環境及び協力体制をつくる。
- (2)「学生たちの自己省察力の育成をめざした音楽科教員養成カリキュラムの研究」を構想し、科学研究費補助金の申請を行う。
- (3)コア・カリキュラムに基づいた授業実践の具体的な検討や「教職実践演習」の指導体制の検討を通して、PDCA サイクルを生かしたFDの可能性を検討する。

### 2. 点検・評価

- (1)他の教員の出張・研修時などに委員会に代理出席するなどして、互いの研究環境の維持に努めた。
- (2)今年度も、音楽コース内でのコア・カリキュラムを構想するために、「学生たちの自己省察力の育成をめざした音楽科教員養成カリキュラムの研究」を構想し、科学研究費補助金の申請を行った。
- (3)昨年度と同様に、コア科目の実践において、初年次教育に着目し、学修キャリアノートの活用を念頭に置きながら、授業内容を工夫した。特に、今年度は、学修キャリアノートの記述の仕方を指導した。コア・カリキュラムに関して、「教科内容学研究プロジェクト」に積極的に協力した。平成25年度からは、新たに全員体制で初等音楽Ⅰの授業を担当するように指導体制を変更した。

## Ⅱ-3. 大学運営

### 1. 目標・計画

各教員がそれぞれの立場で、部会や各種委員会等における役割・任務を十分に果たせるよう、コース内の協力体制を整える。

- (1)コース内の連絡等が迅速且つ十全に行えるよう、メール等の有効利用を促進する。
- (2)コース内の役割分担を明確にし、無駄を省くようにする。
- (3)コース内の電力等の省エネを促進する。

### 2. 点検・評価

- (1)コース内の連絡は基本的にメールを用いて行うようにし、教員が学外にいる場合でも迅速に連絡等が行えるようにした。その結果、緊急課題に対して迅速に対応することができた。
- (2)コース内での役割、たとえば演奏会関係、練習室関係、教育機材関係、書記・会計等を教員で分担し、効率よくコース内を運営した。
- (3)講義室や研究室の電灯を最小限の点灯に留めることを実行した。授業中、講義室や研究室における室温の管理を頻繁に行った。特に、講義室等には、適切な気温を維持するために、温度計と湿度計を設置し、教室環境の管理を行った。研究室の照明(蛍光灯)を常に半分消灯し、可能な限り、エレベーターの使用を避ける等の努力を行った。日頃より、芸術棟6階のピアノ練習室の使用状況を確認し、照明や空調の適切な使用による省エネに努めた。

## Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

### 1. 目標・計画

本コースの専門性と人的資源をもって附属学校・社会との連携や国際交流を展開することによって、教育・文化面で広く社会に貢献すると同時に、そこから様々なニーズや視点を得ることによって、自らの教育・研究のあり方を客観的に捉え直す機会とする。

- (1)附属小学校・附属中学校の研究発表会や教育実習指導、授業支援やLFタイム及び「教育実践フィールド研究」等を通して、附属学校との連携を深める。
- (2)公開講座を、現職教員及び一般社会人等を対象に開講する。
- (3)教育支援講師・アドバイザーをはじめ、徳島県生涯学習情報システム「まなびひろば」など、協力要請に応じて積極的に幼稚園、小学校、中学校、高等学校等に出向き、指導・助言等を行う。
- (4)留学生を積極的に受け入れるとともに、コースとしての留学生への支援体制を充実させる。

### 2. 点検・評価

- (1)附属小学校と附属中学校の研究活動に参画し、研究大会当日は、助言を行った。また、教育実習生の研究授業にも参加し、助言を行った。附属中学校のLFタイムにおいて、「教育実践フィールド研究」と連携させた、大学院生による演奏会の企画、指導を行なった。
- (2)公開講座「楽しい歌唱教室」として、現職教員及び一般社会人を対象とした講座を開設し、定員を越す参加者があった。今年度も、免許更新講習と10年次経験者研修で音楽科教育に関する講座を開講した。教員免許状更新講習は「教師のための声とからだ」と「音楽授業における指導と評価のスキルアップ」を開講した。また、10年次経験者研修は「言語活動の充実に着目した音楽授業の工夫」を開講した。
- (3)教育支援講師・アドバイザーとして、県内の学校に出向き、専門的な指導・助言を行った。
- (4)ハンガリーからの留学生への研究指導を行い、生活上の相談や指導を積極的に実施した。留学生との日常的な情報交換を行い、希望に応じて特別レッスンを行なった。

## Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

文部科学省特別経費事業の一環として、教科内容学に基づく小学校教科専門科目テキスト「音楽」を開発し、音楽コース教員全員で分担執筆した。ここでは、音楽を、認識面からは形式的側面、内容的側面、文化的側面からとらえると同時に、表現(歌唱、器楽、創作)、鑑賞、ソルフェージュを知識や技術の体系ではなく、行為の体系としてとらえ、初心者でも無理なく学べる実践的なものを開発した。また、大学院の教育では、コア科目である「教育実践フィールド研究」において、音楽コースの特色を生かし生の音楽を附属中学の生徒に提供するという「アウトリーチ」を昨年に引き続き行った。今回も附属中学から大変喜ばれた。企画・構想の段階から学生たちは知識や経験を共有することができ、学生相互のコミュニケーションが深まった。今回のテーマは「音楽で世界旅行」としたため、ハンガリーからの教員研修留学生にも参加を促し、自国の民族音楽等を演奏してもらったが、附属中学の生徒のみならず、音楽コースの大学院生にとっても良い刺激となった。この「アウトリーチ」の経験は、音楽コース主催の学内演奏会や音楽コースの大学院生主催により毎月開催される「音楽の芽」の企画運営にもさらなる活力を与え、本学における音楽的な環境の維持向上に貢献できたと考えている。